

平成28年度 学校評価表（自己評価）

奈良市立一条高等学校

学校経営計画		
建学の精神	一条高等学校開校時、初代校長渡邊真澄氏はその出発をコロンブスのサンタ・マリア号の船出にたとえた。爾来、開拓者魂（フロンティア・スピリット）をもって建学の精神としている。生徒達は、校章とともに、この精神を表象するサンタ・マリア号を図案化した副章を身につけている。	
教育目標	<p>教育基本法の精神と本校創設の理想にのっとり、時代の進運に即して豊かな知性と情操とを身につけ、健康で気力にあふれ、人間尊重の精神を基盤として積極的に努力する新時代の人間を育成することにある。学校教育の全面にわたって教育効果の向上を期するため、次の目標をかかげて努力する。</p> <p>(1) 国際理解の精神に生きる視野の広い人間の育成。 (2) 合理的に思考し、着実な実践に努め、人間を尊重して民主的な社会を創造する人間の育成。 (3) 自主的に行動できるとともに、自分の行動に責任をもつ誠実な人間の育成。 (4) 規律・秩序・礼儀を重んじ、社会性と、品位のある人間の育成。 (5) たくましい体力と旺盛な気力をそなえ、信念をもってねばり強く努力する人間の育成。</p>	
目指す学校像(ビジョン)	本年度の重点目標	具体的指標
(1) 師弟一体 (2) 知・徳・体の調和のとれた教育と現代感覚を備えた自他敬愛の教育	「知」 学習指導の充実	基礎的・基本的な内容の定着を図り、課題を解決する能力を育てるとともに、言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力等を育てる。それらを通じて主体的に学習に取り組む態度を養い、学習習慣の確立を図る。また、「学習・情報センター」として学校図書館を計画的に利用し、主体的・意欲的に学ぶ能力や態度を育てる。
研究主題	「徳」 道徳教育の充実	人権尊重の精神を養い、自他の人権を擁護する実践的な行動力を育てる。また、自他の生命を尊重する精神、自立の精神、社会連帯の精神並びに義務を果たし責任を重んずる態度や、公共の精神を貴び、社会全体の利益を図ろうとする態度を育てる。
「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践」 *生徒からのアウトプットを引き出し、思考力・判断力・表現力の伸長を図る ・スマートフォンを活用した生徒からのアウトプット ・教員用タブレット端末の活用 ・その他の取り組み	「体」 体育・食育の充実	主体的に運動に親しみ、体育や健康に関する活動を実践する態度を育成するとともに、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。また、食育の推進とともに、心身の健康の保持増進を実践する態度を育てる。
	「夢」 キャリア教育の推進	キャリア発達を支援し、一人一人にふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる。また、生き方についての自覚を深め、望ましい勤労観、職業観の育成、社会奉仕の精神の涵養を図る。
	「誇」 世界遺産学習の充実	わが国や郷土奈良の伝統、文化、自然等に対する関心や理解を深め、継承・発展させる態度を育てる。また、国際感覚豊かな広い視野をもち、新しい文化の創造と発展に貢献できる能力や態度を育てるとともに、英語を活用して奈良を世界に発信するための表現力やコミュニケーション力の伸張を図る。

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価		年度末評価	
総務	① 育友会と学校との連携を図り、より開かれた学校を目指す。	学年懇談会や学校開放等の機会を利用して、学校の姿をできるだけ保護者に伝えていく。	保護者アンケート	「本校の育友会活動は充実している」の質問にプラス評価が90%以上…A 80%以上…B 70%以上…C 70%未満…D。	—	—	A	A
	② セミナーハウスがより利用しやすい施設となるよう、環境を整備する。	セミナーハウスの老朽化が進んだ部分について、適宜改善していくとともに、利用方法も含めて、良好な環境が保たれるような方途を工夫する。	生徒アンケート	「本校のセミナーハウスは快適に利用できる」の項目で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が80%以上でA、70%以上でB、60%以上でC、60%未満でD。	—		B	
	成果と課題	<p>・食堂の業者の撤退と新しい業者による営業開始に際して、育友会から多くの支援をいただいた。またその後の食堂維持の経費についても引き続きご支援をいただかないと維持できないのが現状である。全国大会等へ出場する生徒の費用の一部を援助いただくなどしているが、大局的な見地から見直しを進めている。</p> <p>・耐震工事にともない体育の授業やクラブ活動に支障をきたす部分があった。また本館の雨漏り対策の工事では授業に大きな影響があり、緊急避難として第一学年の教室を第3学年に移すという不手際があったことは大いに反省している。</p>						
改善方策等	<p>・講堂の耐震工事は急務であるが、予算等の問題や一条高校の将来構想にも関係する部分もあり、断定できる状況ではない。</p> <p>・セミナーハウスについては、宿泊料を充当した修繕は簡易なものに限られる。食堂の空調機器も老朽化が目立つ中で、抜本的な予算を投入して改善していきたい。</p>							

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価		年度末評価	
教務	① 学習指導の充実を図り、さらなる学力向上を目指す。	基礎・基本的な内容の定着を図り、課題解決する能力を育てるとともに、主体的・意欲的に学ぶ態度と能力をもつ生徒を育てる。	生徒アンケート	アンケート結果から総合的に判断する	—	—	A	B
	② 諸帳簿等の的確な運用を図る。	諸帳簿等の的確な運用のため、具体的事例等を示し、作業の効率化を図る。	具体例等の提示	提示回数 3回以上…A 2回…B 1回…C 0回…D	B		B	
	成果と課題	<p>生徒アンケート（4・5番）の結果は、90%以上が肯定的な回答で昨年以上の評価を得た。しかし、少数ではあるが満足していない評価があり、今後改善にむけ取り組む。諸帳簿等の運用は、先生方の協力により教務の業務を進めることができた。今年度の課題については、来年度改善に向け取り組む。</p>						
改善方策等	<p>授業時間数の確保について、考査期間並びに考査後の日程等を調整する。また、行事予定に反映し改善に向け取り組む。諸帳簿の運用についてはデータ等での提示も含め改善に努める。</p>							

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
進路指導	① 生徒の進路実現にむけ、学力伸長のための取組を強化する。	生徒の学習時間を把握し、学習習慣の確立を図るための指導を充実させる。 特に、ICTの活用も取り入れ、多角的に学習時間を把握しながら進める。	学習時間の記録 （年間2回）	1日あたりの学習時間 60分以上…A 間が年間で1人あたり 30分以上…B り何分増加したか。 0分以上…C （6月と11月の比較）-30分未満…D	-	C
	②	学力テストや模擬試験について、結果を分析した具体的な資料を作成し、クラス、学年、教科等で共有する。	各クラス、教科等への学力テスト・模擬試験の分析資料提供回数	提供回数 15回以上 …A （のべ） 6回 …B 3回 …C 提供せず …D	-	C
成果と課題	<p>・学力テスト前の過去問への取り組み、学習室の利用状況、書籍の貸出量およびマナー、1,2年生への進路情報提供等、多くの面で進展があった。・1日当たりの学習時間が6月と11月を比較すると、1年生が4分減少、2年生が13分増加（11月の1日あたり学習時間は1年生で1時間26分、2年生で1時間34分）であった。学習時間量に大きな変化はなく、その絶対量が不足している。・学力テスト等の結果の分析資料提供はあまりできなかった。業務の効率化を図り、引き続き、次年度の課題としたい。</p>					
改善方策等	<p>・家庭での学習時間の確保のために、進路指導部として何ができるかを再検討し、推進していく。（例：学力向上委員会等の発足の提案、学習と部活動の両立への支援）・学力テスト実施後の取り組みを強化する。（例：振り返り学習・解説および成績返却時の指導）・1,2年生段階では特に基礎学力の定着を図れるような環境を整える。・2年生3学期においては、受験への意識をより高める工夫をする。（例：行事見直し）・進学補習拡充のための環境整備および支援を行う。（例：土日の補習に対する手当の検討）</p>					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
生徒指導	① 公共の精神を尊び、より良い社会の実現に尽くせるよう、規範意識や公德心・正義感を育てる指導を強化する。	基本的生活習慣の確立とともに、学校生活や地域社会でのマナーや公德心の向上のために、身だしなみの点検や、立哨指導、校外指導に努める。	苦情連絡の件数	苦情連絡の件数が年間0～5回…A 6～10回…B 11～15回…C 16回以上…D	-	B
	② 人権尊重の精神を養い、自他を大切にすることを、安全で安心できる学校づくりを推進する。	集会・ホームルーム・行事を活用し、互いの立場や状況を認め合い、適切な行動がとれる指導を進める。また、教育相談・生徒支援の体制の充実を図る。	生徒アンケート	命や安全についての指導の評価、プラス評価が80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 60%未満…D 教育相談についての評価、プラス評価が80%以上…A 70%以上…B 60%以上…C 60%未満…D	-	A A
成果と課題	<p>上記の判断基準の内容では、一定の成果が見られるが、特別指導の件数が、この数年に比べて大幅に増加した。自己中心的な判断であったり、安易な考えによるものであったりと、内面的な成長の遅れが顕著である。その原因の一つとして本校の生徒指導のあり方を見直し改善していくことが課題である。また不登校等の支援を要する生徒も多く、その対応を充実させるための整備も急務である。</p>					
改善方策等	<p>・教員の素養として、一人一人の内面の把握に努め、生徒の心や感性に響く取り組みの増加が必要である。またその機会の確保のため、教職員の会議や事務作業等の簡略化や整備が必要である。 ・スクールカウンセラーの来校日の増加も必須である。</p>					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
生徒会指導	① 社会の一員としての規範意識や奉仕の精神をもち、社会・集団の一員としての在り方を自覚する態度を育てる。	中学校と連携し公共マナー向上の啓発活動や社会奉仕活動を行う。	啓発・奉仕活動の回数	啓発活動の回数が年間 3回以上・・・A 2回以上・・・B 1回・・・C 0回・・・D	B	A
	② 校内の規範意識向上や行事の活性化に向けてリーダー性のある人物の育成に努める。	校内活動の企画を立て、活性化に向けての活動を行う。	校内活動の回数	校内活動の回数が年間 3回以上・・・A 2回以上・・・B 1回・・・C 0回・・・D	B	
	成果と課題	小中学生との連携事業ではユニセフ募金と佐保川清掃を計画・実施し地域の方々といっしょに行い、楽しく連携することが出来た。また、日本赤十字募金については校内でも文化祭やハロウィンの時期に実施し、エコキャップ運動も継続して集めて、たくさんのワクチンを贈った。校内活動は文化祭や予餞会が中心となって、それ以外にあまり広げられなかったため、全校生徒参加の新しい企画を提案できるようにしたい。目安箱の活用を期待したい。				
改善方策等	目安箱を活用して、新しいアイデアを聞いていくなど全校生徒から様々な声や要望を吸い上げ、考えていきたい。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
保健体育	① 主体的に運動に親しみ、体育や健康に関する活動を実践する態度を育成する。	体育授業や部活動を通して心身を鍛える。また、食育の推進とともに、心身の健康保持と増進を実践する態度を育てる。	体育大会・球技大会に関する生徒アンケート。	アンケートで生徒の満足度80%以上でA、70%でB、60%以上でC、50%以上でD。	-	A
	② 校内における美化とゴミの減量に取り組む。また衛生観念の涵養に努める。	ゴミの分別と減量について徹底をはかる。校内だけでなく、部室や部活動関係施設の美化に取り組む。	生徒アンケート	生徒アンケートで、ゴミの分別など校内美化の項目で、そう思う・どちらかというと思うが80%以上でA、70%でB、60%以上でC、50%以上でD。	-	
	成果と課題	体育授業や部活動を通して、心身の向上をはかった。体育大会はならでんフィールドで実施することができ、高い満足度を得ることができたが、競技時間の短縮と年々増加する保護者対応が課題である。ゴミの分別に関しては、先生方の協力もあり、かなり改善が見られたが、減量に関してはさらなる努力が必要である。部活動時における熱中症対策等の生徒の健康維持について、引き続き注意をする必要がある。				
改善方策等	体育大会では、来場方法等について、保護者へのよりいっそうの啓発を行う。校内における美化について、意識の涵養をすすめる。ゴミの分別や減量については、資源ゴミを積極的に利用する。熱中症対策や救急救命法研修を実施し、生徒への啓蒙を深める。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価		年度末評価	
国際文化	① 日本文化についての理解を深めるとともに、異なる文化を理解しようとする態度を育成すること。	①行事 文化鑑賞会、国際理解行事の実施 ②留学生や外国からの来校者との交流	生徒アンケート	生徒の満足度平均による判断 80%以上:A, 60%~80%未満:B 40%~60%未満:C, 40%未満:D	A	A	A	A
	② 生徒の読書量を増やすこと。	①朝の読書週間②ビブリオバトルの実施	生徒アンケート 貸し出し数の記録	総貸出数による判断 1000以上:A, 700~1000未満:B 500~700未満:C, 500未満:D	A		A	
	成果と課題	文化鑑賞会、国際理解行事ともに生徒の満足度は90%を越えていた。特に国際理解行事ではC-Learningを用いたアンケートにおいて多くの生徒が「留学したくなった」「紹介された国に興味をもった」など、行事の前後で留学や異文化に対する考え方に変化が見られ、外国に興味をもつきっかけになったと思われる。また図書館では、9月の時点で昨年末の貸し出し数1477冊を上回る1724冊の貸し出し数を記録し、12月時点では2509冊の貸し出し数になっている。その理由として図書館での授業数の増加と以前に比べ気軽に図書館を利用できる雰囲気が増える。更に、ビブリオバトル全国大会に参加する生徒がでるなど、これまで継続した活動が功を奏した結果と考えられる。ただし適切な「読書週間」について課題が認められる。						
改善方策等	異文化への理解を深める方策として可能な限り外国からの留学生や訪問団の受け入れ、全学科の生徒が異文化に触れる機会をもてるように、行事及び受け入れ体制の充実を図る必要がある。また図書館においては書籍のレイアウトや広報活動を工夫するなど、生徒の興味・関心を高める雰囲気作りを努める。今後特に改善が必要だと思われるのは「読書週間」である。生徒のアンケートによれば、「時間が短い」という感想があり、書籍の貸し出し数増加にともない、読書時間の延長を求める生徒が増加している。このことは、これまでの「読書週間」が生徒の読書週間育成に貢献し、読書に対する積極的な態度を育んだ成果といえる。したがって今後は本校生徒に適した「読書週間」のあり方について検討する必要があると思われる。							

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価		年度末評価	
人権教育	① 人権尊重の精神を養い、自他の人権を擁護する実践的な行動力を育てる。	人権教育ホームルームにおいて、生徒が主体的に取り組むことができ、生徒の関心・感性に訴える教材を提供する。	生徒アンケート	「人権教育ホームルームや人権講演会などは充実している」の項目で「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」が80%以上でA、70%以上でB、60%以上でC、60%未満でD。	-	-	A	A
	② 職員研修を通じて、教師自らの人権感覚を養う。	学年研修会の内容を充実させ、活発な意見交換ができるようにする。	人権教育部員によるチェック	全研修会で充分意見交換ができればA、以下状況に応じてB~D。	A		A	
	成果と課題	鋭い人権感覚を養うことと、自他を尊重する精神を育てることが本校の人権教育の要であるが、本年度の人権作文はまさにその結晶といえるような担任と生徒との強い信頼関係から生まれたものだと考える。本校において、喫緊の課題となっている多様な性についての研修も田崎氏をお迎えして約6年ぶりに行うことができ、C-Learningを使った研修に大きな意義を感じることもできた。また、各学年での研修会においても、活発な意見交換が行われ、充実した研修ができたと考えている。育友会人権委員とも講演会講師先生との交流や連携を行うことができた。						
改善方策等	本校設備のバリアフリー部分の修繕・新設が必要かと思われる部分があるので、部内でもどの部分が特に早急に対応すべき課題かを検討していく。支援を必要とする生徒に対して、教育相談チームとより連携を深めるための体制構築が必要であると考えている。							

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
情報	①『情報』を積極的かつ有効に活用できる環境を整備する。	各種のデータ類の管理・活用を主導的に取り組む。オープンスクール等で効果的な広報に取り組む。	総務部が行う生徒・保護者アンケートを基に判断する。	総合的判断	A	A
	②コンピュータや校内ネットワークを用いた業務の利便性と正確性の向上に努める。	校内ネットワークの利活用をバックアップする。成績処理に関する業務を正確迅速に行う。	年度末に情報部から職員に向けて行うアンケート。	「よい」「だいたいよい」が80%以上はA、60%以上はB、50%以上はC、それ以外はD。	-	A
	成果と課題	生徒・教員に関する種々のデータを厳正に管理し、校務に応じて適切なデータ提供ができた。また全校の取組にもなっているオープンスクール（中学生体験入学）については、企画立案運営まで安全によりよい広報につながるよう努力し成功につながった。ホームページも適宜更新し、新鮮な情報を発信できている。環境整備については、SSSの導入により大きくネットワーク関係のインフラが整備され今もなおその途上にある。その中で、情報部がどのように関わっていけるのか、技術的な面や利用規程・運用などについて分掌としての役割が課題である。				
改善方策等	長年にわたって構築されてきた本校の実情に沿った成績処理や様々なデータ管理の実績が、今後も同レベルで維持できるようにしていくことが必要と思う。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
普通科	①現代社会の様々な課題を自らの問題として捉えさせ、生徒が自分の将来を考えるための契機とする。	見学・体験学習の実施	生徒アンケート	有意義であったという回答が、回答生徒数の80%以上ならA、60%～79%ならB、40%～59%ならC、40%未満ならD	-	B
	②生徒の進路希望の実現に向けたサポートをする。	大学見学会の実施	生徒アンケート	有意義であったという回答が、回答生徒数の80%以上ならA、60%～79%ならB、40%～59%ならC、40%未満ならD	-	A
	成果と課題	1年生は本年度から校外学習の内容を変更して、大阪ATCの2施設及び国立民族学博物館を見学した。一定の成果はあったと思われるが、生徒が自分の将来を考えるためのよい機会とするために、実施内容にさらなる工夫が必要である。大学見学会は、3年生に向けての科目選択の時期でもあり、生徒が自分の進路を考えるよい機会となっている。参加態度も熱心でよかった。本年度はコースによる希望人数の偏りが大きかったので、コースの検討も必要である。				
改善方策等	1年生の校外学習については、実施時期や内容も含めて、さらに生徒が興味を持てる行事となるよう検討する。大学見学会については、見学校の一部について変更することや、事前事後の指導を充実させることを考え、生徒の進路実現に結びつく内容にしていく。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
外国語科	① 英語を用いた言語活動を通じた生徒の思考力・判断力・表現力の育成	「総合的な学習の時間」や集中講座においてアクティブラーニングの手法を取り入れた取り組みを実施する。	参加生徒へのアンケート	対象項目への肯定的回答が回答数の80%以上でA、60～79%でB、40～59%でC、40%未満でD	B	A B
	② 生徒の英語運用能力の向上	個々の英語力に合わせた教材を提示し、活用する。	GTEC for STUDENTS テスト	一年間の平均点の伸びが40点以上でA、30～39点でB、20～29点でC、20点未満でD	A	
成果と課題	「総合的な学習の時間」や特別講演、1、2年生の校外での体験学習、奈良市ALTを招聘しての集中講座、3年生の小学校への出前授業等を実施し、幅広く世界や外国語への興味・関心を高めることができた。各行事が生徒にとってさらに魅力的なものになるよう、新しい視点も踏まえて全体計画を立てていくことが必要である。GTECについては、1年間の平均の伸びが、3年生が約57点、2年生が約20点であった。さらに力を伸ばすために、指導についての検討が必要である。					
改善方策等	それぞれの行事の内容を幅広い視点から再検討し、生徒の英語コミュニケーション能力の向上及び意欲の向上により効果的に働きかけられるように努める。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
数理科学科	① 生徒の理数に対する興味・関心及び知的探究心を育成し、進路意識の醸成を目標とする。	フロンティア・サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(FSP)として科学講演会・サイエンスセミナーを大阪大・京都大・奈良先端大等と連携して行う。	実施報告書・アンケート等による生徒評価(良が8割以上で高評価としてカウント)	FSP①大阪大②京都大、③奈先大や、④その他連携プロジェクトの3事業以上が高評価でA、2事業でB、1事業でC、他はD。	-	A A
	② 「第5期科学技術基本計画」に基づき、科学技術イノベーションを担う次代に適應する多様な人材を育成する。	「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」(JST)を中核に据え、奈良教育大・奈良女子大等と連携して生徒の科学技術リテラシーの向上を目指す。	生徒アンケート	対象の項目で肯定的回答が80%以上でA、70%以上でB、60%以上でC、50%未満でD	-	
成果と課題	フロンティア・サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（FSP）の軸に「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」(JST)を据え、昨年までの奈良教育大学に加え、奈良女子大学や大阪大学とも連携して課題研究を実施することができた。特に本年度は、3年生がJST(国立研究開発法人科学技術振興機構)東京本部で科学研究実践の全国発表を行い、これが下級生の課題研究に対する意欲向上につながった。課題研究は年を追うごとに数理科学科の教育活動に大きく寄与しているが、反面、大学の先生方の負担が増え継続が難しくなっている。					
改善方策等	課題研究について、新たに御指導いただける指導者の開拓が必須である。奈良教育大学や奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学等の先生方に早急に依頼しなければならない。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
人文科学科	① 人文科学科の取り組みを充実させ、生徒個々の進路実現の意欲を向上させる。	論文講座、特別講演の内容の精選・充実をはかり、大学・企業との連携の中で実践的な教育内容を導入する。	生徒アンケート	対象の項目で肯定的回答が80%以上でA、60%以上でB、40%以上でC、40%未満でD	A	A
	② 問題発見能力、問題解決能力を養い、実践的な思考力の向上をはかる。	フィールドワーク、グループワークなどの実践的な活動を通じ、協働して課題に取り組みコミュニケーション能力を高める学習内容を取り入れる。	生徒アンケート	対象の項目で肯定的回答が80%以上でA、60%以上でB、40%以上でC、40%未満でD	A	
	成果と課題	大学・企業・国際機関との連携をとりながら、グループワークによる課題研究との関連を踏まえて特別講演、特別授業を実施し、生徒たちの関心を喚起した。これらの活動をより実践的な内容に深め、各機関との連携の強化・継続が課題である。				
改善方策等	主体的な学習活動をより推進するため、生徒たちの自主的な取り組み、具体的にはフィールドワークやグループワークの更なる充実をはかる。計画段階から生徒たちが関わり、研究開発や課題発表の場を校外にも設定するなど特別学科としての活動領域の拡大をはかる。					

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
第1学年	① 規範意識や公德心、正義感を育てる指導を強化する。	ホームルームや集会・学校行事などを活用し、規範意識や公德心の向上を図る。基本的な生活習慣を確立するため、遅刻指導を通して時間や規則を守ることの重要性を理解させる。	遅刻カードの集計	「年間の1学年の遅刻回数」 A:200回以内 B:300回以内 C:400回以内 D:401回以上	B	B
	② コミュニケーション能力を高め、互いの立場を認め合う共感的態度を育てる。	相手の立場を考え、互いの違いを認め合う人権感覚を育てる。学級活動や学校行事でなかまと協力する意識を育て、自主的に取り組ませる。	生徒アンケート	「学校行事に、なかまとともに自主的に取り組めた」「そう思う・どちらかといえばそう思う」の合計が A:80%以上 B:60%以上 C:30%以上 D:30%未満	—	
	成果と課題	①について、高校生としてふさわしい行動がとれるよう基本的な生活習慣の定着を含めて指導をしてきたが、297回の遅刻があった。②については、学校行事への自主的な取組についての肯定的な自己評価も97.1%と80%を大きく超え、なかま作りにおいては一定の成果があったと考える。今後、ホームルーム活動や集会、学校行事を通じて、規範意識や公德心等について、高校生として望ましい成長に向け、更に指導を進めていく。				

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
第2学年	① 進路希望の実現に向けて、具体的な目標をもたせる取組をする。	ホームルームや学年集会を通して、進路決定の助けとなる情報や資料を提供し、自分の進路に対する興味をもたせる。 継続的な家庭学習の習慣を身につけさせる。	生徒アンケート	「自分の進路の具体的な目標ができた」そう思う・どちらかといえばそう思うの合計が A:80%以上 B:60%以上 C:30%以上 D:30%未満	-	A
	② 社会・集団の一員としての自覚を深める指導を強化するとともに、円滑な人間関係を積極的に築こうとする姿勢を育てる。	修学旅行に向けて、団体行動の規律を身につけさせる。また、なかまとともに協力をし、充実したクラス活動に取り組めるようにする。	生徒アンケート	「団体行動において、なかまとともに責任ある行動がとれた」そう思う・どちらかといえばそう思うの合計が A:80%以上 B:60%以上 C:30%以上 D:30%未満	-	
	成果と課題	LHRや学年集会等の学年・学級活動の指導を通して、団体で行動する際の意識・姿勢について一定の成果が見られたが、まだ不十分な部分もある。今後、なかまとともに協力できる修学旅行を目指していきたい。進路については、集会、LHRでの先生方の御指導により、多くの生徒が具体的な目標設定をもつことができた。一方で、具体的な目標設定がまだできていない生徒もいるので、今後も個々に対する指導を継続的にこなう必要がある。				

評価項目	重点目標	具体的方策	判断資料	判断基準（数値化基準）	中間評価	年度末評価
第3学年	① 生徒の希望進路実現にむけ、学力伸長のための取組を強化する。	生徒の主体的な学習を促すため、進路指導部と連携し、家庭学習や計画的な学習方法について適切なアドバイスを与えるとともに、情報提供と意識の高揚を図る。また、部活動との両立を図るために取組を強化する。	生徒アンケート	「希望進路実現にむけての情報提供やアドバイス等が効果的であった」が A:80%以上、B:60%以上、 C:40%以上、D:40%未満	-	A
	② 進学や就職に対応できる能力を身につけさせる。	進路の取組に向けて、授業や平日・長期休業中の補習等の内容を充実させる。また、部活動等で補習に参加できない生徒への個々の対応を強化する。	生徒アンケート	「授業や補習等が進路実現のために役立つ」が A:80%以上、B:60%以上、 C:40%以上、D:40%未満	-	
	成果と課題	①が87.2%、②が85.9%と生徒の評価は高いものとなっている。進路指導部、各教科と連携しながら、LHRや学年集会を通じて情報等の提供をし、アドバイス・指導することができた。補習等に関しても生徒の動向を考慮した設定がされていた。これまでの先生方の多大な尽力に感謝するとともに、生徒たちの「人間力」の成長、そして希望実現に向けた真剣な取組が、センター試験をはじめとする大本番に成果として表れていたことは本当に評価してあげたい。				